



高知県 早明浦ダム 上流より堤を望む
(公財)高知県観光コンベンション協会提供

ジャンル ー 河川

5-2

早明浦ダムの建設②

四国4県に貢献する四国の水がめ

早明浦ダムは四国4県の水道用水、工業用水、農業用水の他
発電や洪水・渇水対策にも役立っているんだよ。



1. 水没する地域との協調

吉野川総合開発計画は、昭和 41（1966）年に吉野川水系水資源開発基本計画に引き継がれ、早明浦ダムに加え、池田ダム、旧吉野川・今切川河口堰、香川用水、新宮ダム、高知分水および富郷ダムの建設事業も合わせ、総合的に推進されることになりました。

早明浦ダムによる新規開発用水（ダムができたことで新しく利用できる水）は年間で 8 億 6300 万立方メートル。徳島県に 47. 5%、香川県に 28. 6%、愛媛県に 19. 4%、高知県に 4. 5%ずつ配分されることになり、各県でのダムへの期待は高まります。

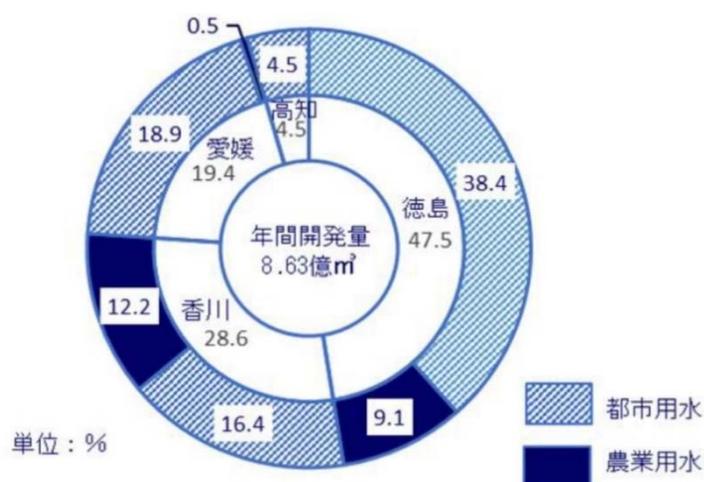
しかし一方で、水没のため移転を余儀なくされる地域や家屋もあります。移転対象は、高知県の大川村 164 世帯、土佐村 156 世帯、本山町 2 世帯。3 地域でダムに対する意識は大きく異なりました。

大川村では、村議会がダム建設絶対反対の決議を行いました。昭和 37（1962）年には鉄筋コンクリート 3 階建ての村役場を新設して反対表明の砦とし、村長を会長とする「ダム建設反対同友会」が結成され、調査立ち入りを断固として阻止したのです。

土佐村では、村内の 3 地区で「協力」「条件次第で協力」「反対」と対応が分かれました。土佐村役場ではダム対策事務局を設置し、水没地区の代表者による委員会を発足させて、建設省との話し合いを行いました。村議会が建設省にあてた意見書には「水没する地元は真に困難な社会問題を抱え、受益は乏しいにもかかわらず、反対に水没しない他地域が永久に莫大な利益を享受する」と書かれ、同意と納得が得られる配慮が求められました。

本山町では、町議会議員の全てが賛成したわけではありませんが、早明浦ダム建設協議会を結成するなど、おおむね協力的でした。

昭和 38（1963）年、建設省は、まず本山町に早明浦ダム調査事務所を開設し、大川村と土佐村への立ち入り調査に関する協定を結びました。大川村は絶対反対の姿勢でしたが、高知県が嶺北地域開発促進計画の検討を始めるなど、県や国が熱心な働きかけを行い、関係者が相当の労力を費やした結果、補償と村の再建に関して県知事と県議会議長からの誓約書を取るなどした上で、昭和 40（1965）年に立ち入り調査を受け入れ、同年 7 月の県議会で早明浦ダム建設の議案が可決され、水没・移転の問題も一応の解決をみたのです。



早明浦ダムの新規開発用水の配分。

2. 高度な建設技術

早明浦ダムの建設工事は、昭和 38（1963）年 4 月、建設省により着工されました。昭和 42（1967）年 4 月に、水資源開発公団に引き継がれ、地域の住民との補償交渉がまとまるのを待って、同年 10 月にダムの基礎掘削がスタートしました。

早明浦ダムは、大量のコンクリートの塊で、ダム自体の重力で水圧に耐える「重力式コンクリートダム」です。掘削が始まったのと同年の 12 月にはダム本体のコンクリート打設が始まり、118 万 8,990 立方メートル分を打ち終えたのは、4 年後の昭和 46（1971）年 12 月でした。

土木工学的に注目されたのは、日本で初めて「フィレット」が採用されたことです。フィレットとは、ダムの上流側の下部にコンクリートで厚みを持たせた部分のこと。高さが 106 メートルもある早明浦ダムですが、基礎岩盤がもろくはがれやすい性質のため、高さ 46 メートル部分から、勾配 1:0.6 のフィレットで厚みを出し、岩盤と底部の接触面を広げて安定性を確保しました。この工法は、以降多くのダムで採用されるようになりました。

早明浦ダムは、昭和 48（1973）年に完成し、11 月には竣工式が行われました。しかし、昭和 48（1973）年には濁水問題が、昭和 50（1975）年と昭和 51（1976）年には、2 度に渡り想定を上回る

雨量による大出水が発生したことによる濁水問題も起こりました。水資源開発公団では、それらに対応する工事を行い、危険区域の家屋移転、汚濁補償などを行い、昭和 54 (1979) 年 3 月に、これら全ての工事が終了したのです。

3. 銅山川からの分水

ところで、吉野川の上流には銅山川という大きな支流もあります。銅山川の流れる四国中央市には、現在上流から順に富郷ダム、柳瀬ダム、新宮ダムという 3 つのダムがあり分水が行われています。

銅山川からの分水が考えられ始めたのは江戸時代末期でしたが、明治維新の大きな動きや資金難でそのアイデアはずっと実現しませんでした。時は流れ、昭和 12 年には分水のための工事がやっと始まりましたが、それも戦争などで中断され中止となってしまいました。

さらに時が経ち、第二次世界大戦後の昭和 29 年、四国初の多目的ダムとして、まずは柳瀬ダムがようやく完成します。その後は吉野川総合開発計画の一貫として、新宮ダムと富郷ダムも建設されました。また、早明浦ダムによって下流域への水の安定供給が可能となり、それだけ銅山川からの分水が容易になりました。

分水は、水を得る側と失う側では、利害関係が相反して、調整には長い時間が係ることとなります。銅山川分水では着想から柳瀬ダムができるまで約 100 年を要しています。昔は水害と干ばつも多く、産業の発展も難しい地域だった四国中央市。しかし川とダムを有効利用できたおかげで、現在は、日本有数の製紙工業地帯となっています。

4. 早明浦あつての四国

現在、早明浦ダムは運用開始から約 40 年が経過し「あつて当たり前」の存在ですが、その存在がなければ、「水」が四国にとって味方ではなく敵になる機会が、もっと増えていたはずで

たとえば、平成 6 (1994) 年の夏の渇水時。最も取水量を減らした第三次節水期間には、13 立方メートル/秒になつたはずの吉野川の水量が (徳島県池田地点)、早明浦ダムが補給していた水が上積みされ 47 立方メートル/秒確保できたのです。下流では本来の 3 倍の水量が確保され、香川県にも送水を継続することができ、渇水被害が軽減されました。

逆に増水を食い止めたのが、平成 16 (2004) 年です。吉野川沿いの徳島県三好市三野町を台風が襲来しましたが、早明浦ダムの治水により被害は最小限に留まりました。「新編三野町誌」には、築堤の威力に感謝すると綴られています。

もちろん災害時だけでなく、毎日の地域生活の安定と産業の発展にも早明浦ダムが貢献しています。四国 4 県の水道用水、工業用水、農業用水として送られ、発電も行われて、例えば、日本一の紙のまち愛媛県四国中央市や徳島市吉野川下流の産業集積も早明浦ダムなしには、現在のような発展はあり得なかったでしょう。

早明浦ダムには「四国のいのち」と書かれた石碑があります。確かに、早明浦ダムは四国の命綱として、欠かすことのできない大切な役割を果たしています。

5. 早明浦ダムが教えてくれる3つの大切なこと

1. 四国四県が力を合わせた。

四国全体を発展させようという強い意識が、四国四県が力を合わせ困難な利害の調整に取り組む原動力になった。

2. 県をまたがる広域事業として実施された。

四国だけでは分水を巡る過去からのいきさつもあり困難であった調整が、広域的な河川行政を行う国により行われた。

3. 四国の未来の発展のため尽力した先人の思い

過去のいきさつを踏み越え、将来の四国の発展のために早明浦ダムの必要性を判断し、知恵を出し合い粘り強く努力した先人の思いが事業を完成させた。



早明浦ダムの慰霊碑。



「四国のいのち」碑。